

---

# 家族ごっこ。

如月ゆり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家族ごっこ。

### 【Nコード】

N6105C

### 【作者名】

如月ゆり

### 【あらすじ】

何にも無い家族の日常。でも僕たちは他人同士。これは悲しくも優しい僕の家族の物語である。

## 第零話：僕の家族

ジリリリ！！

「……………」

ジリリリリリリリリリ！！！

「うー……………んん」

ぱちん。

「ふああ。眠ー…。支度……………しなきゃ」

### 『第零話　僕の家族』

眠い目を擦りながらカーテンを開けて外を見る。

道端には雨によって落ちてしまった桜の絨毯。

コンクリートで出来た無機質な地面が白く染め上げられていた。

「……………雨のバカヤロー」

せっかくの桜が。

こんなことならこの前の日曜に花見に行っておくんだった。

明後日に行ってもこのぶんじゃおおかたが散っているだろう。

せっかく母さんが弁当を気合い入れて作るって言ってたのに。

思わずため息。

そもそもこの前の日曜に行く予定だったのを父さんと二人で野球観戦に行きたいからと断ったのは僕だ。

確かにあの日のゲームは楽しかったけど、花見が潰れてしまうとは

……。

アサが怒る姿が目には浮かぶ。

（お兄ちゃんのせいなんだからっつ）

はぁー……。何てことだ。また口を利いてもらえなくなる。

裕くーん、まだ寝てるのー？そろそろ支度しなさい？？

うわっ！そうだった！早く下に降りていかないとアサが起こしにきてしまう。

……………朝からそんなハードな展開はごめんだ。

パジャマを脱ぎ捨て制服に着替える。僕は家族の待つリビングへと降りていった。

「あら、おはよう。裕くん。やっと起きたのね。」

「おはよ、母さん。もう起きてたよ。ただ、少しボーっとしてただけ」

下の階に降りていくと、まず先にキッチンの母さんが僕に気づいた。一体何時から起きているんだろう。キッチンには朝ごはんのための道具が散らかっていた。

相変わらず片付けるのが苦手な人だ。

「…まあ。また遅くまで本を読んでいたんでしょう。目に隈が出来ているわ。あれほど夜更かしはしちゃ駄目って言っているのに。そんなことだから朝から元氣ないのよ！もう…。朝ごはん用意してあるわ。食べて少し目を覚まさない？」

それだけ言つと　それじゃあ陽太さんを起こしてくるわ、と言つて寝室へと向かつていった。

父さんも朝が苦手な人だ。

リビングまで出てきてもまだ目は覚めていないらしく、朝食を食べこぼしている姿を偶に見る。

僕はそこまで酷くないのだが、やっぱり朝は苦手だ。  
昼から学校に行けたらどんなに素晴らしい事か。

そんなくだらない事を考えながらダイニングへと向かう。テーブルには所狭しと朝食の山。

キツネ色にこんがり焼けたトースト

湯気の立つミネストローネ

しっかりとした焼色のグラタン

揚げたてのハッシュポテトに唐揚げ

僕好みの半熟の目玉焼き

極めつけに母さん特製のフルーツヨーグルトと言った具合だ。

思わず胃もたれしそうな量にメニユーがズラリと整列していた。

それを妹、朝美が黙々と食べている。

「おはよ、アサ。……………毎朝ながら、よくその量が食べられるね」  
「ん？お兄ちゃんか。おはよ。今日のグラタン、ミートソースが入ってる。なかなかこれも美味しいよ。少しくらい食べたらいいのに、勿体無いなあ」

無駄にキラキラと輝く朝食に心なしが胃がむかむかしてきた。

……………ごめん、母さん。僕には無理だよ。

「……………無理。勿体無いならアサが食べてよ」

「ホントっ？ホントにいいのっ？」

「どーぞ。好きなだけ」

「やったあああ！」

朝美は本当によく食べる。僕の数倍は食べるんじゃないだろうか。その細い身体にどこまで大きい胃袋が入っているのかは謎だが、まあ健康みたいだし僕にはそれでいいかなと思う。

「おはよう……………」

「父さん。おはよう」

「あつ、おとーさん！おはよ」

ふわあ、と欠伸をしながらやってくる父さん。

珍しくいつもより目が覚めているらしく、母さんにコーヒーを頼んでからダイニングにやってくるとちらり、とテーブルの上　と云う名の朝食のパレードを見つめてゲンナリとした顔をした。

（……さやかさん。またか）

（また、だね。父さんからもうちよつと何とか言つてよ。見てるだけで食欲減退）

（う、うん。そうだねえ……）

こそこそと二人で会話する。

母さんが料理を多く作りすぎるのはいつもの事として、朝食だけは勘弁してもらいたい。

僕だつて胃痛を起こさずに学校に行きたいのだ。

「さやかさん。ちょっと」

「なあに、陽太さん？あ、分かったわ。アレでしょう？用意しておいたわ！」

「え、そうじゃなくて……つて、アレ？」

「はい、どうぞ」

無駄に輝く笑顔と共に母さんが持ってきたもの。

ジューサーいっぱい緑色の液体。

「さ、さやかさん……。一応念のために訊くけど、これは……？」  
汗をだらだら掻きながら引きつった顔で問いかける父さん。今きつと父さんの脳内では「嫌な予感」という言葉がテロップ表示されている筈だ。哀れ。

「何つて、決まってるじゃない陽太さん。青汁よ。あ・お・じ・る！この前の健康診断でお医者さんに野菜を多く摂って下さいって言

われたんでしょう？野菜と言ったら青汁じゃない？作ってみたの！  
さあ、どんどん飲んじゃってね！」

あーあ。やっちゃった。

そんな事を母さんに話したらどうなるのか予想ぐらいつくものなの  
に。

（おとーさん、馬鹿だね）

（しっ。二人に聞こえるよ）

こうなったら関わらない方が身の為だ。

僕は用意された朝食の中から比較的少量盛られているヨーグルト  
を引き寄せて口へ運び始めた。

「.....」

沈黙。

「さあ！」

きらきら。

「.....」

.....

更に沈黙。

「飲みますよね？健康のためなもの！」

輝く笑顔。

「.....」

.....はい

押し負けた。隣では朝美がうわあ、といった目線で父さんを見つめ  
ている。

激しく同感だ。

「あら、二人も飲んでいいのよ？注いであげるわ」

「.....っ！！げほっげほ！！」

「えええーと、僕はいいよ。うん。ほら、もうこんな時間だし！そういう日は朝から委員会の仕事あるし！！もう行かなくっちゃ！ごちそうさまー！！」

「ごほっ、ごほっ！…あ、アサも今日は日直だからもう行く！ごちそうさまー！！」

二人して脱兎の如くリビングから遠ざかる。

父さんが恨みがましそうな目でコツチをみているけどそんな事は気にしていられない。

朝から胃痛もごめんだが、青汁の方がもつとごめんだ。

こうしちゃられない。

もともと委員会の仕事なんて今日は無かったが家に居ると危険な気がするので僕は学校に向かうことにした。

急いで支度をしてから玄関に向かうとそこには朝美がいた。

「あーああ。朝食食べ損なっちゃったよ。おとーさんのせいだ……

……」

「あれだけ食べたんだからもういいんじゃないかと僕は思うけどね……」

「ま、いつかあ。学校でお弁当たべよつと」

「どんだけ食べる気だ、この娘は。」

「……………まあいいけどね。じゃあ、行こうか。行って来ます！」  
「いつてきまーす！！」

玄関から飛び出して朝美は左へ、僕は右へ。

また今日が始まっていく。

\*\*\*\*\*



つい最近から始まった日常がそこにはある。

挨拶。

家族団らんの食事。

笑い顔も、泣き顔も、諍いも。

ついこの間から始まった事。

僕たちは赤の他人だった。

姿も

声も

存在も何一つ知らなかった間柄。

アルバイトという名のもとに出会うまでは。

僕たちは「赤の他人が仮初めの家族を演じ、どこまで親密になれるか」という研究を目的にアルバイトとして雇われた。

両親を含め家族を持たず、現在就労状況が無職のものに限り応募資格があるアルバイト。

契約期間は一年間。

その期間の住む場所と働く場所や学校は与えられ、集められた人間で家族となり暮らす。

監視カメラや盗聴器がある訳でもなく、定期的に観察者が家を出入りする以外は普通の生活を営めばよい。

約束事はただ一つ。

「己の過去を明かさない」という約束でのみ僕たちは暮らしていた。

家族を失い、  
やるべき事も無く、  
そんな中で出会った赤の他人同士がする『家族ごっこ』。

これは悲しくも優しい僕たち家族の物語である。

## 第零話：僕の家族（後書き）

連載始動ー！

これからよろしくお願い致しますっ（ぺこり）  
頑張って…、更新していく予定ですー！

裕也「頑張ってね。僕も応援してるよ」

如月「うん…！がんばる…！！」

裕也「そして母さんのご飯の量を少し減らしてくれると嬉しいんだけど」

如月「裕也くん…！？その微笑みが黒いよ…っ…！！」

読んで下さった方！どうもありがとうございますっ。

## 第壱話：全ての始まり

懐かしい光景。

僕たちの始まりの日。

『第壱話：全ての始まり』

「ここの中で待っていてね」

「はい」

応接室の前ような場所に連れてこられる。

では、と言って去っていく男を見送って僕は恐る恐る部屋の扉を開けた。

ギイと軋んだ音を立てて開く扉。

扉の隙間から顔を覗かせてみるも、部屋の中には誰もいなかった。

革張りのソファー。

硝子製のテーブル。

高価そうな置物が並ぶ広い校長室のような場所だ。

（どうしよう……）

そわそわする。

こんな立派な部屋に入ったことが無いので落ち着かなかった。

立っていても仕方が無いのでソファーに腰を落ち着ける。

そわそわ。

それでも落ち着かない。

（…場違い。僕何でこんな部屋にいるんだっけ……？）

\*\*\*\*\*

話しは2ヶ月前に遡る。

求人欄で見つけたアルバイト。

一年間、疑似家族をする人材募集の広告だった。

求人欄には何とか計画、とかいう大層な名前が付けられている。

何でも将来性の高い研究だそうだけど、そんな事僕には関係無かった。

（衣食住と教育の保証…）

僕が目にしたのはそこだ。

元々、今通っている中学を卒業したらすぐに家を出て働くつもりだった。

そうしなければいけなかったから。

誰に何て言われようと。

でもお金も無く、住む場所の検討もついていない。

僕にとってこのアルバイトは最悪な状況で見つけた希望の光のようなものだ。

考える間も無く僕は縋りついた。

一親等以内の親族がいないということ。

今年の4月からの就労状況が無職だということ。

年齢も条件もぴったりだった。

そして、

（疑似家族……か）

気味が悪い程の偶然。

それに縋るしか僕に生きる道が無いということも含めて。

運命だろうか？

偶然だろうか？

それとも

僕の過去さえも必然だったのだろうか？

答えは、未だに出ていない。

『みすたにゆうや水谷裕也様 結果通知書在中』

応募してから採用通知が届くまでは早かった。

3度の面接と1回の筆記試験。

その後、僕の下には採用通知とともに規約やら契約書やらという書類の山が届けられた。

その中に入っていたもの。

アルバイト開始日程と集合場所の地図。

そして僕は今その地図に書かれていたビルの中の一室にいる。

ここで話は冒頭に戻るのであった。

（どうしよう…）

緊張して手が冷たくなっていくのがはっきりとわかった。

嫌な汗が背中を伝う。

一年間一緒に暮らす人。

緊張の度合いでいうと、クラス替えとかそういうレベルではない。

どうしよう。

そればかりが頭をよぎって何も考えられない。  
好かれる自信はあった。

ただ、心配は別にある。

どうしよう。

（もしかしたら、今度は……）

コンコンッ。

そこまで考えたとき、扉がノックされる音が部屋に響き渡った。

## 第壱話：全ての始まり（後書き）

ようやく一話分、更新…！

おめでとう、自分！

裕也「その割には進んでいないけどね」

如月「うっ…！（泣）」

裕也「見てくれる人が意外にも多いんだから、もう少し頑張つてよね」

如月「うう…っ。……ハイ」

裕也「まあ、今日はこの辺で許してあげるよ。次回はもっと頑張るんだね」

如月「（何で上から目線…？）…分かりましたです」

お読みくださり、有難う御座いました！

更新速度は亀並みですが、次話もお付き合い下さると嬉しいです！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6105c/>

---

家族ごっこ。

2010年10月20日16時10分発行